

したがって既存の方法を実際に応用してみて、その方法がどの程度使い得るかとか、どのような場合には使い得ないか等を具体的に調査し、その結果、その方法の改良発展をはかることは極めて必要なことである。

この意味で根本氏の「類似法の Verification」は注目したい研究であるが、調査期間が短かかったのは残念で、今後の発展を期待したい。

なお、今大会の席上でこの種の研究に対して発表する価値があるのかといった発言があったがこれは極めて遺憾なことであった。

勿論、この種の研究は純粹の学問ではなく、技術とい

うべきものであろうが、予報の問題が現在の気象学の大きな部分を占めていることを直視すればこのような発言は出来なかったのではなからうか。

この外、高橋氏の「モンテ・カルロ法による災害対策の研究」長尾氏の「シンギュラリチーの機構とボーエン氏の仮説との関係」は両氏とも以前から取りくんでおられる研究を一層発展させたもので興味深かった。

最後に筆者の浅学の為と、たまたま会場係をおおせつかっていたため聞き逃しがあって誤解している点があるかも知れないことを深くおわびします。(筆者：名古屋地方気象台)

551.508

4. 気 象 測 器

藤 原 美 幸*

今春の気象学会年会の講演申込題目中測器の研究とみなされるものが、全題目数97に対して6題目あった。最近の傾向をみていると戦後の一時よりもその数はむしろ減少しているようである。測器の研究は他に比べて労力と期間がかかるものが多いから出題数でその盛衰を論ずるのは危険であるが、この方面に関心のある人にとっては寂しい気がするかも知れない。今回はまだよい方で内容的にも充実していると思われる。その題目は

- (1) 小沼啓助 (法政大学工学部)：回転風速計における慣性誤差の一解法。
- (2) 小林寿太郎, 外山芳男 (気象研究所)：ラジオゾンデ用露(霜)点温度計の試作経過について(第4報)
- (3) 小林寿太郎, 経塚貢 (気象研究所)：ラジオゾンデ用電位計の試作経過について(第3報)
- (4) 石川業六 (気象研究所)：熱遮蔽されたゾンデ内の温度調節について。
- (5) 石川業六 (気象研究所)：輻射フラックスメーターの新設計
- (6) 青柳二郎, 吉原善次 (気象研究所)：レーダー等雨量線装置の試作

の以上である。そのうち(1), (5)は講演者の都合で講演中止となったので詳細は不明であるが発表されたものは何れも内容が充実していたように思う。その概要と討論された問題点を次にのべる。

(2)はクロームメッキを施した小さな鏡に露又は霜をむすばせその面のくもりを交流の光電管出力として取り出し、telemetering unit に掛ける方法であるが、寒剤にフロン11と12の混合物を用いることによって有効な温度範囲を広げることが出来たこと、感部全体の熱容量を

小さく設計し、Dobson の露点計よりも感度と精度をあげたのが新しい点のようであった。測定結果としてわが国ではじめて成層圏下部の露(霜点)を測定し、下層では毛髪湿度計の結果とよく一致する結果が得られた。各部の動作状態について綿密な低温試験が行われているようだが、総合的動作について低温試験をすることが望まれる。零度附近の結露が霜か露かのまぎらわしさはこの装置のもつ必然の欠点であるがそれよりも低温における霜点の正確にはかるかどうかはその価値がかかっているといえよう。

(2)は零点の変動、leakage 防止等に更に問題は残っているようであるが、ラジオ用小型電池管3S4を電信計に用いて成功している点、とに角、飛揚試験を行って成層圏までの伝導度を測定し得たことはこの一連の系統的な研究が前項と同様に成功の段階にこぎつけたものとして著者らの努力に敬意を表さずにはおれない。

(4)ラジオゾンデ自身の温度変化を少くするため輻射による昇温を利用したもので輻射と熱伝導の熱平衡を解析した。従来ゾンデと周囲の空気との間の伝導による熱交換は複雑な問題とされているが、これを一定容積のポリエチレンの袋をかむせて一定条件化することをねらった点は興味深い、それが仮定でなく事実そうになっているという実験的裏付けがほしいように思われた。数多い飛揚の結果はラジオゾンデの設計に価値の大きい資料を提供していると思う。

(6)レーダーを広範囲な面積雨量の測定器として用いるために降雨エコーの contour をブラウン管上に描かせたいというのは久しい要求であったがこれが我国ではじめて実現したことは非常に意義が深い。実用になるまでにはまだ改良すべき種々の点があると思われるが点状に分散している echo を平滑して contour をかかすような方法を考えることもその一つかも知れない。

* 気象研究所高層研究部

現在の気象測器（主として地上ルーチン観測用のことであろうが）があまりに古典的であることは夙に佐貫亦男博士も指摘された。現在すでにオートメーション化した工業測器に較べて大部分の測器は未だ18世紀的沈滞を保っていると云えよう。いわゆる「重工業の高度な生産様式からひどくたち遅れた農村の生産様式」と社会科学者の云う「資本主義のびこな発展」をわが気象界も地で行っているのかも知れない。

新測器の研究がその学問技術の進歩の基礎をなすことは気象学にとっても例外である筈がない。一般に測器関係の研究は多くの予算を喰いその機会に恵まれることが少い上に労力が大きく地味である。またその割に研究者にとっても報われることが少いようである。特に最近の如く進歩した技術が一方にある場合、簡単な思いつき程度では高度な要求に応えることは困難であろう。筆者は

今回の各研究者のように地味ではあるが系統的な研究に正当な評価と敬意が払われなければならないと思う。わが国でも戦後相次いで輝かしい高層解析の成果が得られた。併し、そのかげにはその data を解析可能ならしめた高層測器の改良に、今もなおつづけられている独創的な努力があるのを忘れてはならないであろう。予算や研究費の問題は学会の範囲外のことであるが、測器関係の研究者を報われぬ下積みの技術者にみる空気、data を使うこと以上ではじめて学問であるというが如き空気があったとすれば上に述べたような観点から警戒すべきことであるし、また反対しなければならない。

またこれと同時に境界分野の技術者にも気象測器の進歩に貢献した場合大いに評価し、その意欲をのばし、その成果を摂取することはともに日本の気象学界の今後の課題でもあらうと思う。

学 界 消 息

1. 東北支部および北海道支部設立さる。

日本気象学会、東北支部および北海道支部が設立され、第1回支部大会がそれぞれ6月20日、7月12日に開かれた。その役員は次の通りである。

	東 北	北 海 道
支 部 長	間 野 浩	中谷宇吉郎
常 任 理 事	高橋 正吾 内海徳太郎	山岡 保 八 鉄 利助 孫野 長治
理 事	山本 正三 伊藤 亀雄	山田 国親 吉田 順五 安井 善一
監 査 理 事	山本 義一 大内 浩	
幹 事	難波 信吉 大西 外史	清水 良作 小林 禎作

2. 岡田賞選衡委員さる。

学術関係第1回岡田賞は日本気象学会創立第75周年記念会で授与されるが、その選衡委員は次の諸氏にきまつた。

理事長	畠山久尙氏 (気象研究所長)
理 事	正野重方氏 (東大教授)
	荒川秀俊氏 (気象研究所予報研究部長)
	今井一郎氏 (気象研究所高層気象研究部長)
	岡田先生記念会理事長 和達清夫氏 (気象庁長官)

3. 地球物理連合会の32年度当番学会は日本海洋学会
地球物理連合会の昭和31年度の当番学会は日本気象学

会であったが、その任期を終え、32年度は日本海洋学会が担当することとなった。

4. 日本気象学会創立75周年記念

日本気象学会創立第75周年を記念して、11月9日(土)に式典が行われ、同月7日(木)、8日(金)に研究発表大会、10日(日)に講演会が催される予定である(詳細は表紙4)。

5. 日本気象学会創立75周年記念事産資金寄附者名簿(10)

昭和32年6月9日から7月6日までに御寄附を頂いた方々(到着順)は次のとおりです。なお、これをもつて由込受領証に代えさせていただきます。もし掲載漏れの方がありましたら至急御連絡下さい。

121	玉井駿男	6口
122	井出恒夫	6口
123	鍋島泰夫	6口
124	島田守家	6口
	小計	24口
	総計	1,262口

6. 気象集誌および天気への投稿依頼

日本気象学会機関誌 気象集誌および天気への論文投稿が最近少いので、奮って御投稿下さいますようお願いいたします。

7. 日本気象学会創立75周年記念論文集

既報のとおり、75周年記念論文集は欧文篇、和文篇に分けて編集されつつあるが、その内容をつぎにかかげる。